

中東へのオリエンテーション

地理学に基づき歴史を描き、歴史空間を借りて物語を紡ぐ Hawthorne

小宮山真美子

はじめに

ボストンのセーラムに生まれ、ニュー・イングランド地方を拠点として活動してきた Nathaniel Hawthorne にとって、オリエン特は生涯未踏の地であった。しかし、多くの書物からその空間と歴史にアクセスし創作に取り入れている。本発表では、第一次エジプトブームに沸いた 19 世紀前半の時期にホーソーンが携わった、子供向け教養書 *Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography* (以下『パーレーの世界誌』) から、中東地域に属す歴史を取り上げた。その上で、作家として駆け出しの時期に本書を執筆した経験は、その後のホーソーン作品にどのように反映されたかを追うことで、19 世紀のアメリカ人作家ホーソーンにおける中東について考察した。

1. 19 世紀における「中東」(≠オリエン特)の位置

地理的に遠く隔てられた 19 世紀アメリカの意識下で、そもそも中東とはどのあたりを指していたのかを探るため、まずは地図を用いながら「中東」の位置、およびタームの起源を確認した。ホーソーンはテキスト上で“Middle East”という語の代わりに「オリエン特」や「イースト」という表現を用いているが、その語自体が東の方位を示すように、「中東」空間はヨーロッパの東、オスマン帝国周辺のイスラーム圏を指し、のちにインド、中国、日本の極東地域へと奥行きを広げてゆく。Edward W. Said の指摘にあるように、「オリエン特」は単なる地理的な区分ではなく、オクシデントとの間にも設けられた思考様式であり、植民地支配の過程で作り上げられたひとつの概念である「他者イメージ」として表象された。

一方で「中東」というタームは、オリエン特よりも実体的な空間の中に位置付けられる。Clayton R. Koppes の調査によると、“Middle East”というタームが出現したのは 19 世紀末から 20 世紀頃であり、地政学的文脈の中で同時多発的に登場した。アメリカ海軍士官 Alfred Thayer Mahan の「ペルシャ湾と国際関係」(1902 年)では、ロシア帝国が中央アジアへ向かう勢力をくじくため、イギリス海軍の拠点を置くべき場所としてオリエン特空間に「中東」という語で境界線を引く。また同時期にイギリス陸軍の Thomas Edward Gordon は「中東問題 (Eastern Question)」(1900)と題した記事の中で、“Middle East”を使っている。つまり中東というタームは、19 世紀から 20 世紀にかけて、ヨーロッパが東側をどう征服してゆくかという課題の中だけでなく、アメリカ海軍の欲望の視線も交えながら出現したのである。端的に言うと「中東」は「近東」と「極東」の間に位置する、「陸からも海からも利用価値のある地域」を指し示す記号として、外部の力によって生み出されたのだった。

2. 『ピーター・パーレーの世界誌』(1837)における中東のはじまりと終わりの場所

全 204 章の 2 巻本から成る本書は、雑誌 *Token* の編集者 Samuel G. Goodrich に依頼され、パーレーの教科書シリーズとしてホーソーンが執筆した。世界中を旅したパーレーおじさんが、地理と歴史を織り交ぜながら子どもたちに物語するという形態を取り、人類が住み始めた場所の順にアジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアと 5 つの地域の歴史が語られる。中東の歴史はどのように語られるのか、という議論を進めるにあたり指針としたのは、5 大陸における中東地域の出現箇所の分析である。本書が世界史の枠組みを移動させながら「ユニバーサル・ヒストリーを語る」という形態を取るからには、その恣意的な動きそのものが、ホーソーンのナラティヴの中心軸となっているのではないかと考えた。ならば時間を示すローマ数字の章番号が大きくなるにつれ、語られる地域がどのように移動してゆくかを追うことで、ホーソーンが語る中東地域の歴史の動線が可視化されるはずである。

注目すべきは、中東という地域はひとつの大陸で完結することなく、アジア、アフリカ、ヨーロッパの 3 つの大陸にまたがって語られる点である。ナラティヴの中心軸となる場所の移動を追跡すると、トルコを起点として、ぐるりと時計回りに、東はパキスタンまでゆきア

ラビア半島を通る。アフリカのセクションではエジプト、および地中海沿岸を抜け、ヨーロッパ地域で再びトルコに移動してゆく。これはちょうど第9章“More about Babel”の中に配置された地図に重なることから、中東のはじまりをこの地点と定位し、現在のアラブ地域の歴史形成の下地となったオスマン帝国に関する記述を追いながら分析を試みた。最終的に、1826年の段階で「スルタンはこれ以降、トルコの風習を改め、ヨーロッパ諸国の慣習を取り入れて改革をすすめてきた」(UH 362)とあるように、イスラームの側がヨーロッパへと近づく舵取りをしたと語られる。トルコがヨーロッパ大陸に組み込まれてゆくという文脈は、列強諸国が中東空間を「リソース」として搾取しようともくろむ未来を示唆している。西側が「中東」と名付けた行為が示すように、ヨーロッパ側はイスラームの同化を受容するのではなく、中東地域はあくまで利用すべき客体(=眼差される空間)として置かれたのである。

3. ホーソン作品における中東

ホーソンとオリエント研究の先駆者である Luther S. Luedtke は、「彼の生涯と創作にとって(オリエントは)重要なサブテキスト、さらにはコンテキストを提供している」(Luedtke xxii)と指摘する。しかしながら作中に登場するモチーフは、イスラームの宗教的な影響は無害化されており、「神秘的で曖昧な謎の表象」という役割を課せられる。中東にまつわるモチーフを3つの系統に分けると、一つ目は三作品に出てくるダーク・オリエンタル・ヒロインであり、聖書や神話のキャラクターの名を持つヘスター、ゼノビア、ミリアムが、オリエンタルな妖艶さと危うさに結び付けられる点である。二つ目は、John T. Irwin が指摘するように、神秘的なヒエログリフ(時に雄大なナイル川)の象徴が、そこに潜む意味を解説させるための媒体とされる点である。三つ目は「彷徨えるユダヤ人」のモチーフで、共同体に同化できず孤立する個人を、ユダヤに付随するディアスポラ性として描いている。

一方で、晩年のイタリア体験において、ホーソンはユダヤ民族とゲットーという空間に、中東地域から追い出されたユダヤの現実を目撃する。東ローマ帝国の名残りを至る所に残すローマでの体験は、これまで想像的な表象でしかなかった東洋を、『大理石の牧神』の中でユダヤの血を引くミリアムという人物へと変換する。ミリアムの「謎めいたよそよそしさ」を Elissa Greenwald は「ユダヤ教とキリスト教徒の間に社会的に課せられた距離」(Greenwald 132)と解釈したが、この宗教間の距離感を地理的空間に落とし込んだ場所こそが、ローマの異界のように描かれた「物理的にはローマで一番汚く、醜悪な地区」(IV 387-88)であるゲットーだったのだ。

おわりに

ホーソンにとって、ヘブライニズムとヘレニズムが交錯するローマに赴くまで、中東を含む東洋は、謎や神秘を表象する文学的モチーフとして扱われてきた。しかし『大理石の牧神』において、ユダヤ的背景を持つミリアムと「ゲットー」という空間が描かれるとき、その中東表象はより具体的で複雑なものへと転じる。ゲットーに対する嫌悪や、ヨーロッパの歴史的重層性を体現するミリアムに向けられた警戒の視線には、ホーソン自身の困惑が色濃く表れている。彼が選んだ「距離を取る」描写こそが、他者性へのリアルな反応であり、19世紀における現在地での中東に対する無意識的な位置づけであったと私は解釈した。

引用文献

- Greenwald, Elissa. “Hawthorne and Judaism: Otherness and Identity in *The Marble Faun*.” *Studies in the Novel*, vol. 23, no. 1, 1991, pp. 128–38.
- Hawthorne, Nathaniel. Vol. IV, *Marble Faun*. 1968. Ohio State UP
- . *Parley's Universal History on the Basis of Geography*. Newman, 1837.
- Irwin, John T. *American Hieroglyphics*. Yale UP, 1980.
- Koppes, Clayton R. “Captain Mahan, General Gordon, and the Origins of the Term ‘Middle East.’” *Middle Eastern Studies*, vol. 12, no. 1, 1976, pp. 95–98.
- Luedtke, Luther S. *Nathaniel Hawthorne and the Romance of the Orient*. Indiana UP. 1989.